



能世一茶集

四

入 5
利
1258
4



俳諧一葉集附合之部三



元禄二己巳

菖蒲子々六三三
吹沙けくくしきの雪
物々物降くぬ野さハ立
七輝山を如くうの月
所造了葉の焦く砂くけ
家奈くはくふりくすの画

古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

菖
菖
菖

空
菖
菖

坊主も老もいふに追之出
土の餅つく神事おまら
生簾千燃付らふ市い多
り等々疎つ松りきり可け
吉白丸境おふ食をつふ
ふらうと鳥をよとる眼
舌根り念佛を修ふ屋土
小味八福の中には何れも
杖と歩生路り破上りあ
膝行不伝や姨控の月
夏あや垣根代らう嵐衣
頂をけらお物の下ーき

霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪

名の夏と申すの尺達りま
川の五のうつら桶の名を
柴垣の古ふおハ破ま
清とよんいら様はら
季とよのこのひしを
賢きる言れ月了ひめく
長門より西の歌は根
粥子玉るを何と
山とよむの橋名を
もろり藤をくノ費
やうとせん大江の岸ハ
削りて以て林家の

雪 霜 雪 霜 雪 霜 雪 霜

伊謀及とわ山酒のぬきり河法
直能の杖子神も霞つこ
花くまう能子物もさあし
流こみ (と) 田新 渡りま

翁 聖 翁 聖

陽炎の赤肩子に下紙衣の用
水和くう子しけしとぬく音
拙のたより智法のみく物あつて
あまううそあまう旅の海可け
いさうらうと回しとわしとわし
うらまをかくり物しとわし

翁 曾良 嗒山 此筋 良 翁

萩原ハ多海子ぬれこも 阿向ふ
地ふくくく 阿併の松明
玉内中し小神の待も祝以し
あしとてふ人たうも物さし
ほそくさうとぬのやさしき
まをそらうに火焼ぬきぬき
手よまひくくく 待法とむる
物のきもまをさう次子
柳の葉く山を可けの家
松 舟あつて東ハ舟と花
浪ハくまうの宿士を物す

翁 山 良 翁 山 良 翁 山 良 翁

昔の葉ハ猿ノ海に波はたらくん
 夕の暁を 旅人 染うら
 夕の暁を又おろきをおむるの上
 展甘くきく只のすく舟
 真すちと世をうらぐ杜宇
 かなはくすの矢も扱つ丸葉
 花のたの波ををさぬ、花を
 ぬさくくしつゝ火燈をす
 一書
 夕の暁を又おろきをおむるの上
 米とふちくけ流のきく浪
 旗のみはたさくくくくく

翁 里 翁 福 良 梅 柳 雪 誓
 翁 二寸 曾良

かくの風程を物干さく
 秋の夕陽を花とあま
 際生くれくすまのつこもり

翅輪 秋鴉 桃里

四月廿二日

風流のけめわたくの何程歌
 夕の暁を又おろきをおむるの上
 水とて下層の石やまきしん
 露の味をさういふす
 一書
 夕の暁を又おろきをおむるの上
 秋の夕陽を花とあま
 際生くれくすまのつこもり

翁 良 翁 福 良 梅 柳 雪 誓

女成るのーやとほむ物
あつ時ハ増も管の入ぬむ
梓の小枝子、をを摘、こ
うみてハ蝶、島の足も悟し
雲の陣、山や白雲おもけ
酒よりハ軍を送る、軍、本こ
秋を走る、方と物よ、一信
文、秋の登つ、不破、麻の角
鳥のお休の、位ふせ、月
いろく、の、行も、ち、舞、あて
少、き、骨を、は、糸、糸、お
山、死、尾、を、く、手、や、む、あ、い

翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船

芥 塚、と、う、信、あ、つ、め、い、ふ
勢、い、く、雪、舟、一、筋、の、法、あ、つ、て
村、の、く、式、す、の、み、氣、の、木
華、く、ぬ、の、あ、志、の、昔、今、い
字、子、百、花、く、あ、若、さ、つ、の、し
多、枕、子、あ、さ、あ、耐、を、さ、い、入、て
何、や、の、事、ハ、た、ぬ、ぬ、七、又
任、多、る、宿、の、枝、れ、自、を、足、よ
す、き、希、く、む、と、あ、の、ぬ、め
切、櫓、枝、く、く、く、に、く、強、し
左、山、鶴、の、あ、さ、さ、く、く、く、
海、さ、や、ほ、ち、を、く、く、あ、さ、あ、い

翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船 翁 良 船

穀生石花にふくしつる
石をききりてぬりききりて
酒の中より心のききりて
六十のほろろ人の正月に
春の月すくわたり少細る

新良翁新良

業門可伸の如く業の本はのち後を
むすべし

翁

から好むや月をぬきて肝の業
すれり業はくすりて
きり崩す山はけはるすれり
畔傳ひする石の棚

栗廬
等翁
曾良

把くく吉業くくわりの業くく
秋走くく魚は鱈屋をすれり
梓弓矢の羽は家をかきりて
新業もよきく 曉の夜
松留余の吹弱くくすの業
海の遠恨をくくく海を
聲入の海はゆめくく脚
されておくれの業はゆめ
業くくを種くくく業はゆめ
月のくくくをひくくく
鶴くく海魚釣くくく
笠の端をすくくく

等雲
次平
素業
翁
富
翁
新良
翁
業
竿
業
翁
富

梅子あつて秋夜やと一冊の付
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢

翁 良 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢

翁 良 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

おまのあつて秋夜やと一冊の付
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢
かきくたふる昔も証被あし
るはにまをきしつるまの夢
まゆのふれぬ意敷きくま
まの野にまをきしつるまの夢

風流
翁

菊他跡千花を折るくさ
芳之のくさや虹の如き
そらそら月を三千里隔て
了市をけく物もくさむ
襟けさる紐父のろくをそつ
筆こころみくおをさこめ
梅うさうみきこやき記瓶子
すくれをゆけく酒さすこ
三歌尺のさき古の思ひれ了
波のさきくさの暮るる
雪くぬねおのきく肥く
蘇少みちけるあのとくさ

孤松 菅良 柵風 熟華 涼 如柵 木端 扇 扇

のさきくさの暮るる
疾ゆくくさおさくく
そらそら月を三千里隔て
了市をけく物もくさむ
襟けさる紐父のろくをそつ
筆こころみくおをさこめ
梅うさうみきこやき記瓶子
すくれをゆけく酒さすこ
三歌尺のさき古の思ひれ了
波のさきくさの暮るる
雪くぬねおのきく肥く
蘇少みちけるあのとくさ

松端 扇 良 扇 風 柵 良 扇 涼 涼

秋文々 松子りからん 菘のま
くくひすたせき 屏風の谷組
あけきうあをきく 夕日 香
出 蝶の紙より 大ゆのかう 火
まの 紙の 香も 疎きして
よく 絶して 定ふ 紗道の 白張
ほくくし 石のうら 戸の 崩れ
まくくさく 山も ちの けん
あつあつ ちを ちうく 袖あて
まきくく ちひ 於 蝶さふ 命

良 温 板 風 依 菊 瑞 風 菊 柳

清く 成家 ちかよし 秋きくし
あきの ぬきく ちの ちうと 禁
藤子 之 尾上 の 清も 回し けり
夕月 ちうく 二の 丸の 伝
楠 あり 茶人 けり ぬき 筆の 香
菊の つれ ちかき ちうく の ち
あつあつ 石の ちひ けん 紙は ち
山 ちの けり ちの ちの ちの ぬき
ちの ちの ちの ちの ちの ちの
秋田 酒田 の 浪ま ちの ちの ち
ちの ちの ちの ちの ちの ちの
素く ちの 虫の 雷 ちの ちの

清風 管良 素英 風流 菊 英 菊 依 良 菊 風

多艘手美人のかしら巻く
雲すけりるを誓ひの船
八月や申酉の方折るや
原を越る破る子の戸
干船の舟をいかに花あて
七手のくけり牛角芽を
性痛しの膝をさかぬん
火串をくくす西に長
扇をいかにききさる一
ぬけしけりいかに
くけりる石の井掘る天乙女
艶あつたききは舞うい

良 英 風 篇 良 英 風 篇 良 英 風 篇

物りまゝの位偏りみ
まのれをいかに
一きりハ紺白の袖をいかに
かきまはしるいかに
夕の夜高きいかに
木賊の男や葉わすれ
あつたいかに
り人のあつたいかに
物りまゝの川上の
追つたいかに
花のあつたいかに

英 風 良 英 風 良 英 風 良 英 風 良 英

起所の麻子ゆつりて小春の
物ちえりり夕夕の薫
り煙いそ然燭のあけりん
石少いそりて花の月の
まはるる青花はらの新し
大の音の絶てハ秋をいふ
げとゆりも念ささるや折つん
雷ゆめぬらハ秋の終り
まはるる秋のちから果の
象のつらき地をえ
いそたも美女とあす
三

清風
英 翁 風 英 良 風 翁
良 翁 風 英 良 風 翁

紅粉白粉の市のゆつり
象のつらき秋のちから
折つり高き象の月の
暈むらら秋の中あ
まの折りて暮雨の干
象のつらき地をえ
いそたも美女とあす
三

良 翁 風 英 良 風 翁
良 翁 風 英 良 風 翁

芳とめしむる大もつれ 残
葉の名をとめはむとかちら
瓜紅うつる双おめ 石
を揚るすれと火のくひ入る
杉ふ人子告る秋 うを
あぢる舟の月ころる言をれ
破くしとさえくしてささる
花のほちを織する 是れ
望樂いともま山うけの塔
稜多村を浮舟の外のま富く
刀 持する甲斐の一 札
岸垣人も通るぬ扉ふし

水 良 翁 水 茶 良 水 翁 茶 水 良 茶

物ふくくひを削る松の木
早あやう整へ白髪にかうしや
集り遊女のなをとも月
葉の浦を貫くもやういぬと結
柴くまをりわくち海をさす
合歌吹本りける屋のかけら
多ししあさす万りの 証
古の友あし法をふくし
を葉 編する舟の葉合
をみそれ沙走の市の名結とし
煤 拂のりを 寺院の家
元人を古ふ懐紙をかきくとも

茶 翁 良 水 茶 良 水 翁 茶 水 良 茶

やま久鳥のまゝいふ入お
ひつてと聖とくくつふ噂のむ
山田の糞をいふとむく南

水 卷 良

十
五

羽豆山舎受阿闍梨のふ流吉甫告本説

菊

有うくやまをこのくす風の音
任作と人の跡やま 外
川舟の強き音も引くま
静の飛石とくはゆる言有
澄も平天をくくく秋のくれ
おも 南と 磁くちくく
残くくハ音のかけまま 豆 終 了

露丸 曹良 菊雪 珠妙 梨水 雪

百里は 磁をも 本音の 牛追
山屋の 山 珠の 磁をも 去む
斧 折すくく 林木の 森
高よみの 磁をも 山の家まへて
豆くく ぬ 磁ハ何と 鬼
古師の 音も 音も 松皮 葛
多き 之 枝くく くの 歌
月尺くく 引 起されて 柳き
勢の 音も 音も 音も 音も
中 音も 音も 音も 音も
的 場 音も 音も 音も 音も
去を 終くく 七つの 音も 力 石

菊 丸 良 水 菊 丸 雪 良 丸 菊

十
六

珠子小峰と付し
山の深き清之くけ帆玉如
藤ふみや里へくるとく
柔解より毎の齋く喰飽く
うのらうく紙折る石の戸
赤櫻と母の記念に極を丸
花子珠子小田の折紙
此秋の門の極極くく
敷丸くも花てしとく
きぬくはねくも同くちの隆
たの女お娘も物受け
算入の花丸くくく

丸 九 良 丸 九 良 丸 九 良 丸 九 良

二
もとの廓ハ桐子焼ける
巻紙のまき一お子焼く
奈良の折子豆敷くめる
はもろく先河くれくや巻揚て
病を多しにけくひき
くけく八国をほくく
雲く子友を付きく
ふりの産も珠子小松 原
堀川のかくも焙つて
おの儀の折くく
くけく
のくく

丸 九 良 丸 九 良 丸 九 良 丸 九 良

経泉のそよぶ陸奥の秋風
初冬の頃よきおのためし
山をふ化つ雪の暮智
尾名男のまきくまら
ゆきかふくおふれ徳橋
花の樹のまきくまら
歌のまきくまら

良玉翁 良玉翁 良玉翁 良玉翁

酒田不玉真の袖浦に上
月かゝる関原をかん海持く

不玉 曾良

氏のかやとのりく 秋風
さきくまらにやまらき 柏
ゆきかふくおふれ徳橋
火を替りけり白髪ふれけり
海をハくらとまふわしきくまら
松あきとおくる武隈のまら
子粒おのりまきくまら
ちまきこのまきくまら
お供してゆきまふ家と忍ん
はまのまもみすのり入
初冬の頃よきおのためし

良玉翁 良玉翁 良玉翁 良玉翁

あまのものをくさる 桐の一葉
おとろふく 食くくくくくくくくく
海寺の小舟をたを上の 夜
新の舟一おとろふくくくくくく
おの木の舟くくくくく 旗
夕あくくくくくくくくく 石の舟
豊くくくくくくくくく 舟
さぬくくくくくくくくく 舟
敷くくくくくくくくく 舟
後くくくくくくくくく 舟
ゆくくくくくくくくく 舟

左葉
曾良
眠跡
此竹
布雲
石雷
瓶華
葉
良
義年
翁
葉

無引くあまの舟くくく
堪あすくくくくくくく 衣
もくくく二人の山本の舟
舟の舟くくくくくくく 舟
舟の舟くくくくくくく 舟
舟の舟くくくくくくく 舟
舟の舟くくくくくくく 舟
舟の舟くくくくくくく 舟

石雷
曾良
翁
良
翁
舟
葉

此乃十句ありし

秋風おくる矢も松より
刈の毫を際すつては捨之し
跪し待たす玉此古壺
舞榭より小枝すむの毫を流し
角のゆくり此ハ長玉あり
二 扉をひく雪舟をわたりき雪の上
一 去り鳥人多かりて飛
重山や倦し小砂を捨ちしむ
科の去りしを鳥居の片
夏てよの百そと魚の名を流す
人吹雪のうき雪の答り

良翁 也右 壺翁 良也 石壺翁

松柏砂粒して風はききし
子を耐きをさるる粒の床
吹り老の杖をぬきし現る
昔の月山子といふ
檜皮むく老の頭此秋意く
志し行し家此海を牛形屋
塔嶺の孤村の夕やうや
清よのありし半時一さ
かたふたし地義の縁石ありて
強よふありし里のそよ外
仇法を尋し老の窓より入
身本をいふきく梅の養生

良翁 也右 壺翁 良也 石壺翁

志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居
志保くく一ふ名や少ね吹居居

枝 曾良 親生 教益 夕布 志保 卷生 谷ト 北枝 披墀 菊

葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...
葉ををむむ法や...

枝 良 生 市 観 枝 ト 菊

かゝらとらうに性あるふふ
一梅子折れおむ三月の月
秋のちかきく糸屑の以ろ
空のあらし之八、袖のさしゆく
美しきよきうさ虫とく尺む
ふしれ子三のふれい九櫃をこに
身うきしひし沸水の板あ
既代たうもふえあしなつ
京ののさすれ仕方ゆき
園のし五の鳥はきれふら
あつさすくしのほくのきけりも
大うこ村さるるきりけり

市翁生ト親翁枝良壻親翁

花うらむ尺ゆる所のきり
風送る鼓吹しと涼しやれ
若ふもいふ女ともいふ
古ふ又子のあしとあしき
あけの情子舞やゆらむ
志らるるかこくを捨りし
花子りきりてをを友
雪のあつた筋よふあやう
うさくしやをふにの山

市翁生ト親翁枝良壻親翁

かゝらとらうに性あるふふ
一梅子折れおむ三月の月
秋のちかきく糸屑の以ろ
空のあらし之八、袖のさしゆく
美しきよきうさ虫とく尺む
ふしれ子三のふれい九櫃をこに
身うきしひし沸水の板あ
既代たうもふえあしなつ
京ののさすれ仕方ゆき
園のし五の鳥はきれふら
あつさすくしのほくのきけりも
大うこ村さるるきりけり

市翁生ト親翁枝良壻親翁

みーいさきまゝふた秋の夕紅影
月うらもゆく地のまゝ了次く
すき百さひいき村れ生垣
秋張取の門をまゝて権の方
小桶の清も終ふ竹の
七つうひとあうしと娘の恩
るて糸ーやうあめらう系
よみ習ふ高き花あゝ地
ともー清もハちうちう月
風さふく暖ーいこゝし
木のり立木干干あゝ編
ふいひたかゝうのれ中と縁理し

一泉 左任 竹意 終子 雲口 乙州 如柵 北枝 曾吹 流志 泉

きしめやゆるみれさういめ
糸うしし箱ア糸ぬよ急名
阿ーも踏くお走山のや
子の戸は花ももしつと和志え
柳少しともしーしといく妻

菊 枝 口 浪生 良

七月廿六日観生亭

めれつゆく人お柳ーや白の葉
花かゝれうすたはやく一
肉尺し漁もあす船あけ
干ぬかゝりしとちらうめ
おれ手屋室の音のかん受ぬ

菊 観生 曾良 北枝 生

乙の心もあやうく初雪
 一しんをちうんうま技持の礼
 何ふくも嵐歌の戸障子
 徒しんも精よ故帳袖く
 うみきくあはれ文ハ却さゆの
 入山此のうま歌しんも
 何あうきんしんも
 甲ハ毎此中しんもから
 追剥の破とあう守秋のこれ
 月しんも起ハ気念の
 長き歌しんも基とつまはるあうき

霜 良 枝 霜 生 枝 良 生 霜 良 枝 霜

翠々層々二人、かえりものこし
 新くとしゆの掃しんもあ傷け
 汗ハあ透しんもあう新風
 四九の門しんも不二のうま歌しんも
 齧しんもしんもあうあうけや
 長生ハ幾々の果の恩源さ
 殊ハ終ハやとんとんもあ
 初あえ茶菜帰のあうあや
 酒しんもあうあうあうあ

生 霜 良 枝 霜 生 枝 良 生

乙れあう人あれ曹のあうあう

霜

ちうくも枯く一葉の秋字
渡しも獨り丘の月うけ
去けし位くお座しき入る
海音にまゝ雪お傘さし
ひそくうきひく大手の梅
きゝや二のまのこし棋の
音つる油隙とらり
袖毛うきまきともわくし
吾子つらされて信のふり
提灯も婦女子のけり
玉子貫ふくぬる山も
葉の戸ハ納豆くくは勢し

亨子
被
子
子
子
子
子
子
子
子

鈴家あつく竹梅きり
時最人ハ二子みぬ鳥
よきて舟うき月ハ川
福持ぬ芦花ハちも
古季の軍ハ骨ハ白
やふ入の崎ハ送く
ちまみほはカ製
くつくしき佛を
法けりハかちハ
きくけて季の餅
きひくまらるる
とくくとめく

子
子
子
子
子
子
子
子
子
子

先祖の骨を傳へたる門
まののちの北上管かく好し
あやうらうらう均穉のうら
秋風をものいふぬ子と流る
きりきり秋のほく葬礼
花のまの古ふおの阿地
まを跡さるる玄何の答
長きや志はるる難波の貝を
浪の小瑠子あやうり 枝
多秋子志くおの埃あさうい
うつくしくはるる秋く霞面
境小袖甚ものうまの古風し

菟 枝 篇 良 枝 篇 良 枝 篇 良 枝 菟

林菟人たる人お菊 菟
野ふの山基子たても淋しき
ゆき花の他つ三の力の細
初昔の字の枕の崎り
か棚もちうの伊勢お能命
疵瘡ハ素島り永もてやま
向うれくもく枇杷はるこ
向ふふ仙女の姿たをやう
あうのを志はるるあまの白浪
仲經の字はるる阿とお流ぬ
寺の使をまきるる上
持持て遊ん花のあうら

菟 枝 篇 良 枝 篇 良 枝 菟

破狂人と保生うれゆく

執筆

九月八日小却し乃の委化

野通

一と(何)く尺智る花の枝のたのむ
むししの徒の病を為縁のふ
浅子もむと又あうに内冷え
あうしにむさむ世のこころふ
板木板の板木を料を信守るむ
念のすくぬるすはむりしに
乳従る人千尺さるる又万巻
尤もこのくす村のまのりさ
恙のくす子海し破れ製と産

曇夕
白之
浅夜
翁
良
夕
通
良

ほろよふあうしとぬふそま呼入
おのちやう花のちとくすくすく
月尺のりきし旅の雲 宋
きん(の)貝拾くる布ふくろ
地糺 色をきん(の)衣さ
きぬ(の)鹿目と種をねあふん
舞、垣根子あやむおとけ
巨鼓ひくもく人ゆめ里の花
るの葉ちとくすくす
きさく(の)や首ゆく胃重くして
あうしにらるる青の星
蓬まらう船子米積がすく

本因
之
翁
通
困
之
翁
夕
良
款

けしきしつしつ 奥州の家
 昔生し 奥の幸都 徳の流しこれ
 林よりきこし 弦小紫の戸
 宿の舟と 別をいふ 安の流の音
 凡遊仕上し 海のみの舟子
 寺の中 操姫のひさる 松名
 よふ石をいれ 佛きくくく
 瑠璃燈の月をともす 一とくこ
 傳の妻 刺 雪の文とく 燈
 をみよし 一とくめく 一とく 踏あて
 鬼うしれと 畔 一とく 細く 一とく
 生れ未し 燈子の 一とく 一とく 一とく

不 風 菊 葉 風 珠 不 菊 芳 風 不

白髪をいれ 一とく 一とく 一とく
 古義長の 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく

葉 珠 芳

園風

残や 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 曆よ 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 秋 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 扇の 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく
 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく 一とく

梅 額
 半 鏡
 去 芳
 良 品
 風 麦
 菊

初かみあまをり 将監り 善
うの鶴あまをり 手お 様也
おこをいともあより 浪走渡のうけ
信誓の海よこれ 素襖をあす じ
かうたのそをも 贈る 古
村人ハ 扉のむらう ころあうそ
鶴江門流をも ころう ころ
造りあまを 母の海も 甘けり
月も 月あめ の良き 定ま ぶあし
妹う ち海を 種舞の生 産
あまを たらす 庭の 芒草 葉
そは くの糸の 衣お 装を 脱 けり

木白 款 配力 麦 風 芽 子 孫 力 水 麦 扇

かーうけり 将監の 重
此 ちり 鶴あまの ねま して ころあ
肩子 持ぬ 付の さき ころあ
あまを 男 けり 尺を ころあ ころあ
さあ けり 尺の 法を ねい ころあ
善 けり 志 けり ころあ ころあ
女 嘆 ころあ 休の 戸の 内
信 誓の 海よ これ 餅を ねい ころあ
背 中ハ 志 ころあ ころあ
ころあ ころあ 旗の中 志 ころあ ころあ
あまを ころあ 尺の 旗 ころあ 魚
あまを ころあ ころあ 志 ころあ 旗 ころあ

芥 白 款 風 麦 不 芽 翁 白 款 力 白

ふらふらりーや路、徒
七つ子夏をかーる深うさ
なううてまを河きま月
柿の木北枝ももるう言を打て
飛てまさかーるや路徒
河り老の路まうひうの徒
小斗の星をつるむ村も
麻の瓜あううてまうつん
松ハ一本山の神
乞食ーるもかまする藤下
縁子しーあうう心いま
まあうらうし路のわうう

力 芳 翁 風 跡 白 款 共 麦 翁 風 跡

とらぬ方此歌をまつむ
此法を火を替る子ひう位
なぬーるまて路徒の名を
引ううく芳翁の路子まう
月の夜を拭しむうふみ
月のおきうみー旅と美ー
さぬーあしーるのうさう

力 翁 風 芳 白 不 麦

あう今ゆーや小斗の星のお
海の芳あうあうつあの橋
一つう心路の本をう路ら松うう

百歳 式之 翁

戸の月を待しのる 舟
 秋舟子木跡紅葉も吹志り
 垂ふふ立ふ成 芳の 籟 了
 節きうう 志賀の 田の 雨きうう
 ぶう おうれく 志賀の 田の 雨きうう
 志賀の 田の 雨きうう
 曇斗ノを付し 雲の 紋
 白粉の 代も や 舞の 娘の 良
 珠の 心 業を も する する
 風と 水手 油 火の けり けり
 舟を 引く 舟の 舟の 舟の 舟の

月夜を 舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の
 舟の 舟の 舟の 舟の

舟の 舟の 舟の 舟の

夕合ふ小船の糸舟の月おこ
秋をゆくこゝろと布多ふし
曾良

あさの北風をきかぬはつら
ゆらゆらとくも何れか入るまきやう
茨やうをも又きかぬはつら
市の子供とまきやうの細布
の面うきまきやうの厚み
曾良

細布のまきやうの厚み
はつらとくも何れか入るまきやう

松名早苗きつてむ食をむ
いふかのれ故やわおすれ
る引のまきやうの青帯うす掛
曾良

風流亭とし
あのかく物室あつた柳
ひらひらひらひらと橋のまきやう
風をゆくあつたの青帯うす掛
曾良

盛徳亭とし
風のまきやうあつたの青帯
かやかの柳をほふ白雨
柳風

柳風

物もろく棒ハさ方子埋けに 木端

六月十五日青島市分亭

翁

涼しき川海へ入らるる水も川
内をゆるぎなき浪の浮海松
黒野の森ゆく危の道めく
胸もとハ胸子さすむきき
波とらのおもひて市を待
新しきさする膏の油火
不操煙のこころまぶる忘
こころれよ松子蟻塚山の壘

會見

令道 不玉 定速 曾良 任曉 扇風

杉の葉もとろく三日月 翁

秋休みの木葉のろくを携へ 不玉

以て踊らるる万花の 法 曾良

翁

葉欄干のろくを花をも子枕

葉のすくもを揚りけら月 棟雪

植るる花も秋のいろも 更也

万のりめけしき葉のいろ 曾良

翁を二枚とめし

小春

ふゆのちの月影もろく秋の樹

ゆらゆら月影の底さすきば 翁

初冬の山あり方北をけし
江よりりる水のみ魚
小枝 曾良

物古を扇引さくこの枝うれ
吹ふと葉子きほひも
小枝 菊

送子
秋のうねり名しの答返如
木田

葉のうねり可葉子如や
菊

吹くこととわつれも秋の風
吹縮の葉おそくおゆる
光清 菊

元禄三庚午

二月六日

古井の姓 葉子 入 春
菊

協 春の浦 葉子 入 春
百葉

指さす方 月 心 ち 心
村鼓

梢を吹折 風の吹くさ
式之

葉を吹折 風の吹くさ
梅額

葉を吹折 風の吹くさ
一桐

葉を吹折 風の吹くさ
槐市

葉を吹折 風の吹くさ
被

昔より海子言破す
古の成りしはぬ言ふかく
とてはほくふふ内ち草
作持多ふは子木実の言
地心人女なすむふ
物物を禁の市は
操婦子むけの事
孫骨孫らちあ
嵐むくさやう
喜の色新古今
尾上もたし
おく雨の言まぬ海

翁木翁木翁木翁木翁木翁木翁木翁木翁

素々子苗も一度
ゆき終るふ人
にしてみる子の顔
ありし米稻は火
柳春もさひ
大肉子井戸あり
地震子らり
子母の里
形尺子ひんを
掛着も小袖の
三味線
東山中

空相翁市木翁木翁木翁木翁木翁木翁

けりもさああり 智恵地のも
まを海に杖 ささげしきのも
水子 玉をのま 子

空之相

木の身とけけと 鱈と 権のふ

菊

西の長 子手 能く 音あり
娘人の志 みるみ 交り きて なる
く 記と ありし ぬ 左 刀の けい なる
月 さらし 候の 内 裡の 司 石
物 白つ くる 松、 とも なる
膝 置し 三葉 菊 子 秋の きたる

菊水 菊水 菊水 菊水 菊水

長ききんし 酒の たる
入 也 子 流 流の 涌 流の みの なる
中 にも せ ぬ の なる なる
よ にも 流 只 一 方 なる
お にも なる なる なる
物 にも なる なる なる
内 尺の なる なる なる
秋 風 の なる なる なる
有 ぬ なる なる なる
子 菊の なる なる なる
眼 丸 なる なる なる
何 にも なる なる なる

菊水 菊水 菊水 菊水 菊水

精のふえこの最の極の言
石櫃の鏡目とてしる昔の家
魚よりれいこの鱈のまね
お方の志はしりやとおも
木幡のしるしのまのまね
まねをたてしる人のまね
井戸のまねのまねのまね
清いまのまねのまねのまね
おしるのまねのまねのまね
痛しるのまねのまねのまね
神よりえらつる船母子のまね
おんちりれ紅つけらるる花さく

半銭 芥 麦 菊 不 洞 菊 麦 芥 不 麦 菊

二のふあつて二の極さけ
陽光のまきりに揚をいふすれ
すけふくせいのまねのまね
まのふれのまねのまねのまね
ひとくのまねのまねのまね
鱈のまねのまねのまねのまね
まに新しきまねのまねのまね
佛佛のまねのまねのまね
ほやまのまねのまねのまね
ひらまのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまね
まねのまねのまねのまね

三蘭 菊 不 洞 菊 麦 芥 不 麦 菊

春のついでに人々のあはれ
きくもあつちのちと名をつけて
融けゆくゆゑのあはれけさ
9 入る二葉の弱も捨てさる
彌ささくあつちのあはれ
あつちのあはれもあつち
きくもあつちのあはれ

伊賀の山中

種芽や花のさきくに交り
火種ふきけの風をく
酒母のあつちのあはれ

芳 麦 不 卷 洞 跡 芳
半 芳
云 芳

秋のついでに人々のあはれ
きくもあつちのちと名をつけて
融けゆくゆゑのあはれけさ
9 入る二葉の弱も捨てさる
彌ささくあつちのあはれ
あつちのあはれもあつち
きくもあつちのあはれ

良 不 跡 不 芳 跡 不 芳 不 跡 不 芳

如 九

四 廿 八

こちれし喜ぶ屋瓶の
新の向のあの子海と
後のは来りあのか
猫の目此を柿核と
何子のもよひの織
かろくも病人あ
も、母してある
とろしと紺布の
そ即の極り物思
けとくも軽くと
まさくは瓶の何
お夕子きくは
いとけくはあ
田鹿の穂と
風と種と牛の子
あつた向越のさ
死すゝ人の何
柿田や次おこ
弟もとるもい
とくく一年の
長くは屋の
おしつたの
お鏡の屋

芳 孫 翁 不 翁 柿 不 翁 柿 翁 芳

いとけくはあ
田鹿の穂と
風と種と牛の子
あつた向越のさ
死すゝ人の何
柿田や次おこ
弟もとるもい
とくく一年の
長くは屋の

不 翁 柿 翁 不 翁 柿 翁 芳

おしつたの
お鏡の屋

翁

お鏡の屋

お鏡の屋

せめては流しきききのきき
初月の氣長繁りたけいひて
石子いひてれきひくし
松の本を秋風さそふおし
礎もやめし羽の息よは
くうれくる如くあれしを結る
名敷く腕のさきくきく
古湯の古いのあを控りく
柿の葉くき重かきし
さくさくぬさふよあしむる結
くききれあひはるあく古
風ふくもあをさけるなこ

奇香
尚白
自咲
通雪
松洞
岳
嶺
吹
玉
宜考
白
洞

杖も松も 雪の家の
ゆあつておし社おあれ
よこしはあひのけそふく
花もえし芽はえさきく
あつて紀くる時ゆさきく
麦あしはさきくさきく
されくも雪の証ゆきく
御火ゆきくしつ松の枝
おとよさきく舟のあつて
そいよさきくきあき
おとよれし麻の子を控り
中の秋吹雪も竹も伐さく

江山
嶺
吹
白
雪
山
美
江
一
窟
篇
雪

五十一
三十一

五十一
三十一

侍人入一小御門の傍
とくく屏風を飾り女子と
ゆらぐ竹の葉子とひしき
菖蒲の葉を吹く風と夕
信ふ年々く青き月駒の
秋のききとを秋の月
手一斗の決りこころに
五六かき生れつけるとあま
と袋ふとよとよとよとよと
追立てくやあかしの刀持
丁粒とあまの月と人
戸陪子とあかしの月と

末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末

了舟とあまの月と人
とくくと字體を化す月夜と
夢とあまの月と人
手とにらりいあまの月と
ゆらぐ竹の葉子とひしき
菖蒲の葉を吹く風と夕
信ふ年々く青き月駒の
秋のききとを秋の月
手一斗の決りこころに
五六かき生れつけるとあま
と袋ふとよとよとよとよと
追立てくやあかしの刀持
丁粒とあまの月と人
戸陪子とあかしの月と

末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末 紀 末

旅の籠をとりけりありし
 正末 水 翁
 十さきしふ女の言もはらふて
 何おもしろいぞ 根のふく
 夕有夜言の萱麻のゆふち
 人ともさき旅し ありふのふ
 こそつふり自惚いそそしぬらん
 又も大るのれ飲をえおす
 堤より河のまやきし ありふのふ
 加茂の社ハ能や ありふのふ
 物しるの鹿を言く名りのけ
 雨のやとりのや ありふのふ
 直成るまはれおれとさき

志うらへし ありふのふ
 糸 根 後 一とふり ありふのふ
 まらハ三月のけりありのふ

秋きて干瓜くき ありふのふ
 貴なるふりえし戸をさすありふのふ
 早稲穂をすくありふのふ
 人ごとくありふのふ
 信棚とさきありふのふ
 虎首はしありふのふ
 春 提し舟のこけりありふのふ

及肩
 弥頑
 之通
 昌房
 正秀
 標志
 項

石地の坂を帰るや切
情はふ草の土工唄り
あつたを跡すき良の借上
那の度と素しあを植るけ
かろくすとすらまのけをの

白足すき草をきかぬ
庭の柿の葉のむしを焼
火桶ぬすむの徳を
お出のの古木枝持末
尾張のめしとるる塩小鯛

百たき見さる川の
字の裏とすのう人ふふ
雨のくもりと昼の夜を
一むらふとてはるの
さむくくの子は飯は
いそくとはくし
あふとあふれて
月のおおきえして
桔梗かろくや
侍者やあは
大工の換をいの
三々の精ふ

八さうくうまきまの吹海
 有陶のくく根のむの底くく
 打のくくまきまのくくくく
 商人の橋まきまのくく秤
 物くくくくくくくくくく
 蒜のまのまのまのくくく
 笑のまのまのまのくくく
 烟のまのまのまのくくく
 字のまのまのまのくくく
 善のまのまのまのくくく
 随のまのまのまのくくく
 字のまのまのまのくくく

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

さくもくくくくくくくく
 菊のまのまのまのくくく
 小のまのまのまのくくく
 くくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく
 菊のまのまのまのくくく

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

白 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

五十一

珠碩 之道

石の多石の昔けをよむ
 彰朝の森を尺くけてきそひり
 ふす月ゆるしきり時向う
 拍子木子物らふ伝のちつれ
 諸を原とくつ答の大作
 月新千三郎 墨く向の上
 只ちくくときくす
 粉をふはるる秋をあらう
 紫の白髪をく物尺け
 手くちくちくく友の歌
 きの葉のくく茶を火
 きの葉のくく茶を火

楚江 勝重 葦香 鬼谷 正秀 別 重氏 重古 扇 子 則 睡

さくやくくくくくくく
 多けきつ了みさくくくく
 以くくくくくくくく
 汗くくくくくくくく
 世久てさくくくくく
 風止くくくくくく
 只くくくくくくく
 月尺をゆくくくく
 秋風子細の若焼石の電
 粟のくくくくく
 支筋ふくくくく

正幸 江 冬 然 成 通 菜 学 冬 睡 通

あむそよふた刀の反方をたよ
長橋子限古送を打とくき
時き 時き ねえ ぬきき
職人の不ゆいそく ねえのけ
南おもし子先とむあそ

重成
柳沅
系
弦五
五

亭の明古殿いぬ初一と行
一火 風は本葉まのりか
役引の勢うめと川とて
狸も 柳す藻とくめろ
まのく戸とまてひくく 香の月

去来
翁
史邦
翁

人子もくねい名物の梨
まふくつ 巻路おのしく秋き
とねくくらよふとくわのこ
何子のまきそゆらハ静し
里んく さんて午の貝ふく
ちつとく 吉年の相葉のまき
菓葉の花のまきとちる
吸物えかのおまきさけい
三里あすのねとまきけり
ひまきと魚回、男はまきけり
さー本付く月め 櫻 萩
若ふくつ 花子あきまき

末 邦 水 翁 萩 萩 末 萩 萩 萩 萩 萩

ひとりの身も一しと物のはた
 一時に二つの物もさうさ
 おもひにうらみおもひの
 火とも一に言ふれはあつた
 汗もきいてこれぞうら
 瘦骨のまゝ起直さうら
 隙をうけてなほこ
 りの人を松敷垣より
 とやまうれぬ刀さし
 せしめけし格を
 おもひ切つて死な
 青天子の月の影

末 紀 末 翁 紀 翁 紀 末 紀 末 紀 末

酒も此秋の比良の
 葉の戸や草を
 布子美あつた
 押合し宿し
 一かたの
 枇杷の古葉

引越す葉のすまや
 柿の首葉をさ
 民よりたの

本草
 支考
 翁

末 紀 末 翁 紀 末 翁 紀 末 翁 紀 末

破山うけの鳩の鳴き
宿し居る松のけの巻の油
残すおそくは種ふまの路
人の尺ぬす(ハ)位物ねい
こふいも舟りゆり起す管
山百々猿のささる枝つき
尾張もつす本宮の大根
破張の巻破いふらひき
可しけしうに味し巻の火
暮るるうらまをまく人を尺知魚
湯の時智るよ 暮るの月
糸筒を知り合する秋の風

史邦
吉来
野重
芳
学
秋
箱
童
来
学
者
翁

虫の鳴くお花をこし
巻味を松も人もあつ
舟りくくく松本二の巻
水の方巻狭さうひの跡る巻
巻の巻くくく白くあつ手
酒入のららる破張けあさる
物のりけくくあむり孝
く花くくくくくあむり孝
縁おとくくくくくあむり孝
扱きくくく桐の巻もあむり孝
はあむの巻くくくあむり孝
かけあむり孝くくくあむり孝

叙
来
童
者
学
秋
箱
童
来
学
者
翁

青い木を食を絶つて積る
踊場をかくし米吏の二子
ふさけし袖を引さく
冊子に紫束のぬき花
さく木の枝のみほふ宣
今川の武蔵を蕨の流
流し多きすすの吏の石
張籠り五百さうの米の
さくののちのあつたさ
所端の埃掃き免し火
死をこころれし組父の
月からの漕れそふ世の

子 翁 浮 学 末 浮 翁 末 子 翁 浮 子

内巻の帳子入し牛の子
蕨垣の川をさうの原の
さうのものし秋を束
傘取うやうのさふ月
柳灯さく切の狂
堀かしの店に店
絶てき味よふ取の
ひく子にさうの紫
ゆきもゆきぬ醫者の
花咲く折端のさふ
代の不さく凡中の

末 翁 浮 学 末 浮 翁 末 子 翁 浮 子

六十五

六十四

伊弉諾子由京樹丸無引

半りそ形も友三や手わす能
あつり去民の付物納
あつり世の女け系部中
やりの取つるおまかちのあ
あつり千のまより月のか人
秋つつあおまらひの枝
實入るや部約の子回部
里ちるくあつるの河
おし割しあつるあつる餅
奉加りあつる倍の平
あつり川や舞屋の去るあつる

示石
ん北
生来
系柳丸
乙州
史邦
玄哉
石
本

右と心つるも荊棘咲く
洗濯の産れ河く結、業
猫のひらき此あつるあつる
あつる上つる下とつる物おまひ
あつるあつる張の襖あつる
あつる幾人あつる名あつる尺あつる月あつる
あつるあつる海あつる鯛の漬焼
あつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる
あつるあつるあつるあつるあつる

好春
石
丸
州
丸
本
丸
丸
丸
丸

おきえんつーくきんつーく
新なる世を信じて引渡り
禁の甲おおてゝ急ぎき
首とくるとくくくくくく
那中へ行く珠のまじけ
月洞く少雨のぬるる地花
寺へ多ては身芽後してふ
花と子と世をまゝ家達て
後の菊をこころづるの氣
泣くもちひさきふき籠ぬぬ
ふえこの取の風をくくけ
去白くくはを尺くむ花を

末 新 石 春 新 翁 石 末 丸

かきくくくくくくくくくく

新

いふくくくくくくくくくく

珠碩

くくくくくくくくくくくく

翁

幅端の長きつゝをさしむ

踏通

花かゝり対向し跡れりの本を

園女

あふふ際をよむるま

翁

昔の戸やのきくくくくくく

翁

蛇まじりのつら水桶の白

乙州

六十一

月代や藤子もさる置首のや
菘走くけくさくさくさく
菘

桿杵や鞠のうさく此はゆの
秋丸く風子もさるさく
珠項
之道
菘

赤人もさるさく酒探煙
去忘くさぶさぶさく
珠項
菘

元禄四年末

名何そとくさくさくさく

かまのわさくめさくゆさく
菘
浅香

わさく猫子也さく猫通さく
菘
此筋

ゆさくさくさくさくさく
菘
小川

ゆさくさくさくさくさく
菘
執筆

仁といさくれさくさくさく
菘
菘

算入さくさくさくさく
菘
菘

是さく古今のさく奥筋
菘
菘

現さくさくさくさくさく
菘
菘

所さく相のさくさくさく
菘
菘

此里さくお傳さくさく
菘
菘

うらひすすきふあつてちのあ
色

梅居る葉中うこのたのよらけ
乙州
志とふいふふくつとせつ
素男
斤陽子出書うえてその月
州
二能の字ハくれくる秋
蜀
板やう勢の法を足るもきん
蜀
編の葉のひのちのふふ
蜀
岩んのけめくくく
蜀

由花改々と呼あつて
州
卯の刻の葉ふふ葉ふ小西方
蜀
すみきく松の勢あつて
蜀
花のれすきめれよしあつて
蜀
雀うこのうの百舌うの一巻
初月
情やふもあつてあつ秋の月
凡北
奴さこすしぬおの海つ
州
捺の柄にますつてつて死の葉
吉来
灰まふらつてつて葉のれ
北

えびと梅ゆつてあつて
曾良

まゝ物わらひしき世一人
以をいんといふれはとまう
折れて陶の中戸のゆら
松平目をさす深きの夕月
面のきりしき音のま
火を替ハ岩の洞もあ
必と半千 殊に明 ね
おとろふ父の白髪を青うけ
折千のきりしき字の物
入さし改まう芥舟のちのれく
何々やまのきりしきや

山翁 通良 翁良 通山 翁山

蛇ふぬとや初秋のり
葛もろく吹かひのり
小粒をまきぬるぬるかけ
物一と末なる魚の
一通りみそれくくる物
出さるる(と背中)あす
歩めしといふれぬ人
自らはくひある 休
物干のさうけうの危り
天橋(と)案の心 看
夕月を替ハ岩の洞もあ

野童 翁 通 邦 草 通 翁 通 翁 通 翁 通

七十一

泥 歩かたしす子て女。きん
石 佛いりきりけりあふり
牛 の骨し牛 化しそや
海 の体かきりけりて
室 の八島にありて
みらぬくはちりうのさ
二 咄の古似するくら
餅 子の友をほりて
家 少ちりて
物 への
疹 して
行 足つて拾ひ

通 学 節 通 学 節 通 学 節 通 学 節 通 学 節

ゆり 能く
供 物
畑 の
歳 花
松 子
や
海
舟
多
は
飯
佛

通 学 節 通 学 節 通 学 節 通 学 節 通 学 節

業を法を契れ一なるを

執筆

佛阿く此情を契るや

標志

月さくくくくくくく

正秀

旅の長を業を毎行する

昌彦

名持 市一の志免らう

整子

度表の字位と人の志を

籍

又魚くくく魚の枝

及肩

窮屈くくくは也

楚に

くくくくくくくく

志

山侍の侍笑の上の志

志

狂歌の集を編く

翁

出来合の物振る

子

小を飛くは垣の上

房

名有りかくくく

美

新編の破のたふ

以

かくくくくくく

翁

子のあふくく

志

咲おのたれく

肩

かくくく干さる

房

帰る房のくく

秀

のくくくくく

子

又くくくくく

江

翁

此のあをを看て猶うさうし
庭のあを物敷のあを替田のたぐ
麻のあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを

菊 房 志 吟 子 美 房 美 子 房 子 房

あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを
あをのあをのあをのあをのあを

菊 房 志 吟 子 美 房 美 子 房 子 房

正秀

遊りの樂をおもひさ
休むも癒さし心の息を
海に心真の境いふせ
生干あゝ素折跡をす
いづもあが枝の
秋をて又一とさ
層縁をく信者の月
ふふのあをさ
痛うつしき
あ射を
相とあ
人情

翁 通 欽 末 翁 通 欽 末 翁 通 欽 末

春月おし
う記
約
確
あ
学
明
大
あ
ゆ
あ
自

翁 通 欽 末 翁 通 欽 末 翁 通 欽 末

六

又といふらうの小嵐あひあす
手も持し物見しりし多し聞か
油のけきぬ虎ハ尾をくく
くくひまのせうしんときうく
極ハ風花をくけてそふく
執家 彦 産 末 学

くくしき船の種並の節多し
厚くく多し船中海地の水
去く壁の中くく破うちそえん
蟻溜の火もくくふ夕月
あのおれし記吉の産葉からさす
野徑 正秀 昌房 翁

踏通

すくし乳をくく物の子
舞やまらやまくくくく
あハ皆くくくくくく
くくくくくくくくくく
産はくくく入洞のくくく
田の中くくくくくく
芝居の札の米砂のえん
ゆ嶽より竹もくくくく
極くくくくくくく
月影くくくくくく
葛麦の白ひのむきく下積
陽片や海子の花をさくく
乙州 画好 珠碩 盤子 里東 探志 游力 彦 通 好 末 力

十一

東風吹きわたる菊水の旗
野の勢くふりく移りしん
皇親上子子あけし家行
恨り義理を供し御とわ
くもれと折ししもの法鏡
くすやうくすししあふ事子の法
御のさしあふ月の廻廊
事子の奇忠臣の地を折現ふ
られ神のくきを御すす虫
ろくとあたまこくしんけり
白髪さしあふしよの命をぬ
やうきしん事親と縁を絶えて

子 秀 通 州 碩 子 秀 通 州 碩 子 秀 通 州 碩 子

野の可くし伸る竹の子は縁
文ハ先之史文選くつし
中保和しやう登のくしね
おさへくし氣を絶しあを
子履ふくしむに信るのま
内書くし信るは在家をむの如
蓋の如入あむやりれ
元禄四年の初冬茅屋の道通と
まじりし

徑 碩 子 秀 通 州 碩 子 秀 通 州 碩 子 如 行

花あし霜をうせりもえ上り
まよふゆゑぬ火屋の白帯
漸と塔のうしろのやうな
腹子のまゆの味気の虫物
まよふまよふまよふまよふ
のの松を思ふに物は
海少し濁るまよふ境のゆゑ
秋風凜々義經のまよ
まよふまよふまよふまよふ
小つゝのまよきまよの月
まよふのまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ

之 水 翁 之 雪 坂 先 鯉 丸 考 翁

まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ

之 雪 坂 先 水 翁

まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふ

翁

貴の火とくく(あ)のまてか
宵の月舟を渡らる(り)りけ
又くく(し)とこ(ま)るまの(あ)
初夜(あ)積(り)く(ま)す(ま)の(あ)お(あ)ひ
初(あ)夜(あ)別(り)く(ん)ら(う)ひ(く)く
旅(あ)の(あ)ら(ん)と(さ)る(あ)れ(て)
ま(く)一(と)き(り)旅(あ)の(あ)る(あ)
物(あ)と(ま)あ(あ)る(あ)お(あ)く(あ)目(あ)を(あ)
く(あ)れ(あ)ぬ(あ)や(あ)と(あ)を(あ)旅(あ)
蒼(あ)天(あ)を(あ)め(あ)る(あ)旅(あ)を(あ)三(あ)笠(あ)山
野(あ)草(あ)一(あ)く(あ)あ(あ)う(あ) 空(あ)

梅人 支考 湘水 并三 桃林 馬蹄 野幽 利雨 越人 桐葉 桃李

元禄三年三月廿七日伊賀上野風瀑
事(あ)り

布(あ)の(あ)り(あ)け(あ)も(あ)さ(あ)く(あ)り
聖(あ)ま(あ)る(あ)人(あ)を(あ)く(あ)や(あ)一(あ)く(あ)真
紫(あ)地(あ)を(あ)あ(あ)ら(あ)く(あ)ほ(あ)と(あ)の(あ)あ(あ)け(あ)し
あ(あ)の(あ)白(あ)ひ(あ)を(あ)あ(あ)り(あ)け(あ)つ
草(あ)花(あ)の(あ)く(あ)ら(あ)る(あ)ま(あ)あ(あ)の(あ)時
旅(あ)の(あ)旅(あ)り(あ)る(あ)旅(あ)の(あ)実
石(あ)壇(あ)の(あ)鏡(あ)目(あ)を(あ)あ(あ)ら(あ)く(あ)あ(あ)
鳥(あ)と(あ)あ(あ)れ(あ)く(あ)あ(あ)の(あ)子(あ)供(あ)お
お(あ)古(あ)の(あ)ま(あ)原(あ)一(あ)り(あ)や(あ)あ(あ)ん
る(あ)雨(あ)田(あ)あ(あ)ら(あ)く(あ)の(あ)ま(あ)の(あ)あ(あ)れ

風瀑 良器 古芳 半残 菊 不 芬 野

交後を尺と人と人のうちひきて
 升戸の端をいふふきんも
 涼さの縁を敷く月を待
 む一ふもをいへりて流すら
 富したるおのくやの尾をさて
 神より尺とてこふもまの錯
 候路より紅粉付らるる花雪
 長手よりわたり二り破酒
 降よりすむ法をいふを飛付る
 高心よりさるる高直の玉意
 何よりさるるめくくのひもむん
 かきい、扇のかき入はけりて

扇 不 扇 不 瀑 芬 跡 扇 不 瀑 扇

きのうとれた杖の拍子あつて
 幸ねもく尺ゆつ招息の上
 風うのひとてつらふの飛
 みほひより法一神のそ玉
 ころそをさかしく提してつらま
 段のさるるやをぬれそける
 月影より終るるうてほらし
 舞すすらふくもあつてふれ
 朝のますしきの中とちとら
 きののかしーのうさるーまふ
 房のるる佛の石巻くふまをり
 椀 椀 盤 の 板 め ら け け さ け

芬 不 跡 芬 瀑 扇 不 瀑 扇 不 瀑 芬 跡 扇 不 瀑 扇

むらさきくさくさの嵐のやうな花さハ
石草すきく目をとて一なる
見多れハ花物さふふひさし
たぐのやうな根すきさ
花あけハむらさきさふふひさし
花すきさふふひさし

瀑 石 菊 花 瀑

以上四十句

久保原年の毛本の目よにけと解も
さうく外のとくしと解もさうく
おもしろい大さ同じませ二句大さ
とも祖翁の相あつてけしけし
お見よしとくも後行くとくひさし

岸て者誰とあう

うやうやし浮無のわは山休く
雪消 残る 細根 大 根
人見のてきかきくさき風す

菊 句空 去来

芽斬しう二葉を茂る柳の枝
さうけのまきさうさうのま
帽すのまけさ角振る
人の返らち菊瓶さふふ
まのす三度飛脚のけし

丈草 菊 去来 乙州

此より先くわんは良のま

翁

浪りかたれしういさく人

丈草

高上たて友ういさくた

許古

たぐ屋もあつた木の梢に

露川

かまきりそゆらうくみの虫

翁

そらる海やほてあもみら

翁

一夜志のさく張りの雲

李由

本可く一はまをち申さん一守

規外

四々五々の時向雲

翁

初階もあつた秋の葉は

翁

もひたひたしきあまの一もと

如行

Handwritten text in a column, possibly bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be in a traditional East Asian script.

Second column of handwritten text, also appearing to be bleed-through. The characters are very light and mostly illegible.

